

まっしろな自由帳の最初のページ。

その片隅に悲しみを描く。それで気が済んだので、わたしは自由帳を閉じて眠った。けれど、悲しみはひとりでは大きくなっていって、まずページ全体を塗りつぶして、それから自由帳を包む。わたしが起きるころには、悲しみは部屋全体を覆い尽くそうとしていた。

わたしはあわてて消しゴムで悲しみを消そうとした。けれども、消すそばから悲しみはふくれあがっていった、わたしに襲い掛かってくる。必死で逃げようとしたが、部屋の扉はすでに悲しみによって閉ざされていて、出るこゝとができない。消しゴムではもう追いつけないと思い、ドアと壁の隙間に入り込んだ悲しみを爪で剥がそうとするが、そもそもそれが間違いだっただ。爪と皮膚のあいだから入り込んだ悲しみは、瞬く間にわたしの身体じゅうに広がり、そして次は心を染めていく。そして、わたしのすべては。……

ゆっくりと眠りから醒めたわたしは、曠がかかったように曖昧な世界で、何かに衝撃動かされるように自由帳を手を取った。そして悲しみを塗りつぶされたその最初のページに小さく描く、殺意を。

キセン「きもち帳」461文字